

# シェリング『世界年代』における時間哲学

マルクス・ガブリエル

翻訳：中島 新

「世界年代」〔Die Weltalter〕というシェリングの記念碑的プロジェクトのタイトルが既に予告するように、この未完のままにとどまった著作においては、「時間〔Zeit〕」ないし「歴史〔Geschichte〕」が問題となっている。シェリングが使用する様々な用語は、彼が根本的に新しいアプローチを企てていることを示す。シェリングは「生成」、「プロセス」、「時間」そして「歴史」、並びに「系譜」<sup>1</sup>やさらには「時間の全系譜」<sup>2</sup>についてさえ語る。

シェリングのアプローチをある伝統のうちへ、とりわけキリスト教的靈感を与えられた新プラトン主義の一つの変種のうちへ加え入れようとする様々な試みが存在した。仮にそれが興味深いものであるとすれば、それはおそらく、まったく別種の、19世紀初頭の歴史配置と関わるから〔だろう〕。その歴史配置は、とりわけそれがカントやフィヒテと共に、非常に狭い意味でのすべての新プラトン主義をも超えているように見えることによって際立っている。というのも、カントとフィヒテ、および彼らの追隨者の中でもシェリングと個人的な交流関係にあり、指導的役割を果たしたロマン主義者やゲーテは、確かに何らかの方法でプラトンから靈感を得ていたかもしれないからである。しかし、プラトンがもはや自明のものでないことは決定的である。シェリングは、古代の終焉を嘆き、古代の神々の死をテーマにし、キリスト教から遠ざかっていく、そうした時期に執筆をしている。その際にシェリングは、近代哲学を眼前にして古代からいまだ残るものは何か、という問いを立てる。

シェリングには一方で古代にまで遡り、他方で哲学的に20世紀を先取りしているというアンビバレントな状態が繰り返し証明されてきた。このことはすでに、彼が実際にプラトンを出発点とし、しかしすでにプラトンをカントのフィルターを通して、また逆に〔プラトンを通してカントを〕解釈することによって表現されている。ここで通常のようにむろん、あるプリミ

---

<sup>1</sup> Schelling, F. W. J.: *Weltalter-Fragmente*. Schellingiana Bd. 13.1, Stuttgart-Bad Cannstatt 2002, S. 169 (zit.: *Weltalter-Fragmente*).

<sup>2</sup> Schelling, F. W. J.: *Die Weltalter*, zit. nach: *Sämmtliche Werke*. Hg. v. K.F.A. Schelling, Bde. I-XIV (元々は二つの部で刊行した: I.Abt., Bd. 1-10 und II. Abt., Bd. 1-4), Stuttgart: 1856-1861 (= SW), これは: SW, IV, 287.

## シェリング『世界年代』における時間哲学

典型的な歴史モデルを用いて、例えばプラトンからプロティノスへと伝わり、さらにペーメ(あるいは別の中間段階)によって媒介されることでシェリングへと伝わる精神的な因果関係が存在するということから始めるかわりに、近代の著者が彼の先達をいかに解釈するのかをわれわれは考慮しなければならない、ということは妥当する。著者が自身の過去を自ら新しく解釈することで変更するということは、シェリングにおいてとりわけ明確になり、そしてまさにこれこそが「世界年代」というプロジェクトの一側面である。シェリングにとって本質的に重要なのは、過去との関係を理解することである。その関係とはシェリングにとって、「偽なるものを真なるものから、間違っただけのものを正しいものから、維持されてきた伝承の内に分け隔てる」<sup>3</sup> ことをはっきりと意味する。時間に対するシェリングの取り組みはまた哲学史への取り組みでもあり、重要になるのはまた、解釈学的時間、つまりわれわれに知られざる過去において著された文章を理解する時間である。

ただし、概して言えば、シェリングへの彼以前の哲学の影響や、彼について語ることでまた今日のわれわれも属するところの彼の後継者たちへのシェリングの影響といったことが、本講演においては重要なのではない。私がシェリングに興味を持つのは、ある独自の貢献、つまり彼が立てる問題への彼なりの解決にあるのである。この際に「世界年代」はひとつの重要な役割を演じる。というのも、「世界年代」はシェリングが約20年取り組んだプロジェクトの一部であるからである。

私の主要テーゼは、われわれがいまだほとんど適切に理解できていない時間の新次元をシェリングが発見した、ということである。というのも、われわれは依然として、時間がまず第一に物理学的モデルにしたがって理解されるべきだと考えているからである。このモデルにしたがえば、時間は、そもそも〔それが次元を持つとするなら〕、たんにひとつの次元を持つにすぎない、ないしはただ一つの次元であるにすぎない。これに対抗してシェリングは、われわれがそれによって時間を理解すべきとされるモデルは、とりわけ彼が「真なる過去 *wahre Vergangenheit*」、「本来的な現在 *eigentliche Gegenwart*」、「現実的な未来 *wirkliche Zukunft*」と呼ぶ三つの力動的次元を持つと言う<sup>4</sup>。そこにおいて、「世界年代」として理解されたこの三つの次元は、シェリングが繰り返し実存的〔*existentiell*〕時間へと立ち戻ることで明らかにする根本的断絶によって特徴づけられている<sup>5</sup>。

---

<sup>3</sup> SW, IV, 217.

<sup>4</sup> 234. シェリングは「世界年代」ではっきりと「あらゆる哲学することの力動的な精神」について語っている (SW, IV, 215).

<sup>5</sup> 例えば次を参照せよ。「もしも世界が、いくつかの<いわゆる>方法を<考え>たときに、行きつ戻り

## 第1部【講演】と【発表】

既に述べたように、「世界年代」はまた解釈学的な時間哲学あるいは歴史哲学として、すなわち典型的にはハイデガーやガダマーによって実践されたような、古典テキストの新しい読解による哲学の進歩可能性への取り組みとしても読まれうる。私は本講演ではこうした側面にほとんど言及しないだろう。その代わりに、私はシェリングによる実存的時間概念の弁護に専念する。シェリングの時間哲学は「世界年代」のなかで密接に彼の述定理論と結び付けられ、さらにこの彼の述定理論は必然性、偶然性、可能性および現実性といった彼の様相理論と結び付けられているから、私は本講演の終わり際にこの理論を取り上げることになるだろう。より詳細な時間哲学の理論的基礎づけについてはあとでゼミナールの際に論じることとする。

「世界年代」のテキストは部分的に非常に異なる議論を細部に含んでいるから、私の講演もゼミナールも、現在われわれの手元にある「世界年代」のテキストすべての完璧な解釈を求めようとするものではない。それでも、私は、私があなた方に私の講演で表現しようと思う、守る価値のあるいくつかの根本理念が存在するということから出発する。私はそのことによって、他の側面がそれ自体でそれほど意義を持たないなどと主張するつもりはない。私はシェリングを同時代の人間だと見なすから、私の読解はある体系的な関心によって刻印されている。シェリング哲学の大部分は論拠に関していまだまったく解明されていない。このことは、ここ100年の多くの解釈者たちが、シェリングを彼の先駆者たちに還元し歴史の中に埋め込もうと努力してきたことに部分的には理由がある。しかしその際にシェリングの論証の独創性は見落とされたのである。古典家の解釈は常に、せいぜいテキストの中にある指標となる論拠の再構成にすぎない。われわれの興味を引く道筋は、われわれがその上を進むことのできる道筋であり、このことが前提するのは一方でわれわれが興味をもって解釈し、他方でわれわれ自身の想定を改めることができなければならないということである。なぜなら、シェリングは多くの点で、基準化された現代の時間哲学とは考えを異にしているが、それでもシェリングは、そこからわれわれが何かを学ぶような仕方では別様に考えているからである。私は彼から何かを学びたいがためにシェリングを読むのだが、シェリングも同じ理由で例えばプラトン、ペーメ、スピノザやカントを読んだのである。

---

つ終わりがなく移行している原因と結果の連鎖であるとしたら、本来の意味で過去も未来も存在しないであろう。[...]なんとわずかな人々だけしか本来的な過去を知らないことか！力強く、自ら自身から分離することによって生じている現在なしに、なんらの過去も存在しない。自らを自身の過去に對置できない人間はなんらの過去も持たず、あるいはむしろその人間は決して過去から現れず、絶えず過去に生きている。同様に先の人々も、あらゆるものが先へと進んでいく一方で、常に過去を恋しく思い、先へ進まないが、現在の力なき罵りによるかのごとく、過ぎ去った時間の無力な賞賛によって、彼らがこの現在において何ものにも作用できないということを証明するのである。」(SW, IV, 222f.)

## シェリング『世界年代』における時間哲学

シェリング時間哲学の主要テーゼは、不等質性テーゼ〔Heterogoneitätsthese〕として定式化することができる。このテーゼは、ひとつ以上の時間の次元が存在し、時間の諸次元はそれ自体で、すでに安定した連続体や時間の流れに埋め込まれていないことを意味する。時間はシェリングにとって、川のように過去から未来へと流れたり、あるいは物理的時間のように、結局極限的にはもはや時間の矢さえ理解できないほど等質であったりするような媒体〔Medium〕などでは決してない<sup>6</sup>。時間はむしろ自体的には曲げられている。というのも、シェリングにとって時間は常にそこで或るものが生じるプロセスの時間だからである。時間はプロセスの入れ物ではなく、その中でプロセスが生じる空間でもない。それによってシェリングはとりわけ、例えば生成それ自体は生成せず、運動〔kinêsis〕それ自体は動かされない等々を主張したアリストテレスと対決する。時間は自ら生成し、時間は三つの次元、「三つの大きな寸法」<sup>7</sup>へと展開するのである。

「世界年代」におけるシェリング時間哲学の出発点は、シェリングが言うように、根源〔Ursprung〕あるいは始原〔Anfang〕の思想である。その際シェリングの念頭にあるのは、考古学としての、形而上学の古代的理念の独創的再構成である。古代の形而上学の根本理念は始原から、つまりアルケーから始まり、そこからあらゆる存在者〔Seiende〕を理解しようと試みる。古代形而上学の根本問題は、ソクラテス以前から、あらゆる存在者が共通に持つのはなんであるか、である。次のようにこの問いへの動機を説明することができる。すなわち、存在するすべてのもの、すなわちすべての存在者は、存在者として認識可能であるためには何らかの特性を、例えば一般に或るものであるという特性を持たなければならないように思われる。こうした論述の近代の変形は例えば、存在〔Sein〕や実存〔Existenz〕は、もろもろの特性を持ちうるという特性であるということ述べる。このことは、古代の実体概念の背後にも隠されている<sup>8</sup>。生じるすべての存在者は、或るものを或る存在者にする重要な特性を継承しなければならない。実存へ入り込むことが存在することは、あらかじめ存在者を存在者と成した特性を継承することを意味する。この特性は、継承可能であるためには、既に前もって現存していなければならない。この特性が例えばもし物質的であるということだとすれば、或るものに

---

<sup>6</sup> 次を参照せよ。「不連続で、自身のあとを継ぐあるひとつの時間の一部によってではなく、時間があらゆる瞬間において時間全体でありかつ時間全体が常に時間全体に続くということをもよおすのみ、時間の流れの像によって表現しようと試みられたかの穏やかな恒久性が把握されうる。」(SW, IV, 292)

<sup>7</sup> SW, IV, 225.

<sup>8</sup> この意味では例えば次を参照せよ: Kripke, S.: *Reference and Existence. The John Locke Lectures*, New York 2013. これに関しては次のものにおいて批判的な私自身の論証を参照せよ: Gabriel, M.: *Fields of Sense. A New Realist Ontology*. Edinburgh 2014 (i. Ersch.).

## 第1部【講演】と【発表】

生成する或るもの、すなわち存在へ入り込む或るものは物質的なものに成らねばならないだろう。そのとき物質は既に現存しなければならないことになる。何が始原として前提されるかに応じて、始原という特性の継承に関して異なる諸見解がもたらされるだろう。

さて、シェリングはこうした理念を一般化し、それを時制的に次のように表現する。〔つまり〕、始原は「最古の存在〔ältestes Wesen〕」<sup>9</sup>ないし「原存在〔Urwesen〕」<sup>10</sup>であると。シェリングはその後「生〔Leben〕」についてさえも言及する。シェリングは「実際先行する根拠は続く状態の母、生み出すポテンツであるから、諸状態の連続および連鎖」<sup>11</sup>として「生」を理解する。生の出発点はシェリングによればまさしく、そこから始原の原質の継承としてある連続を理解するために古代の形而上学が求めたものである。

「真なる学の第一の問いはいまだに、ミレトスのタレスが既に方向づけた問いである。何が第一の現実的なもの、最古の存在者なのだろうか？しかしながら第一の現実的なものという概念はすでに、或るものがあらゆる現実的なものに先立つてあることを前提しているように思える。もちろん、或るものがそれ自体で現実的なものとして定立されることはできない。しかしまた、非現実的なものとしても定立されることはできない。したがって、或るものは自体的に存在者とも非存在者とも定立されることはできないのである。」<sup>12</sup>

この一節においてシェリングは、過去〔Vergangenheit〕の概念を導入する。「過去」はこの場合に存在論的継承連鎖のすでに規定された根源、つまり第一の現実的なものではなくて、「あらゆる現実的なものに先立つ或るもの」である。換言すれば、シェリングは形而上学的に理解された始原に先立つ、ある始原の思想を導入する<sup>13</sup>。その際にシェリングの見るところでは、この始原に先立つ始原は、これまでいまだ考えられたことがなかったのである。まさしくこの意味で、シェリングを用いて次のように言うことができる。すなわち、西洋形而上学は、定義を行う第一の特性つまり存在が後に続くあらゆる存在者へと継承されることとして存在を理

<sup>9</sup> *Weltalter-Fragmente*, S. 173.

<sup>10</sup> いうまでもなく次を参照せよ。「原存在の展開の歴史をわれわれは、われわれに先立つて置かれ、しかもその原存在のいまだ解明されない第一の状態、太古の時代から始まっているように記述する必要がある。」(SW, IV, 222)

<sup>11</sup> *Weltalter-Fragmente*, S. 230.

<sup>12</sup> *Ebd.*, S. 173.

<sup>13</sup> はっきりした表現は次を参照せよ。「しかしまた永遠的なものとは、すでにもっと最初に述べられたように、それ自体ではただ始原の始原であり、いまだ現実的な始原ではない。そのようにして確かに穀物の種は植物の始原の可能性ではあるが、いまだ決して始原それ自体ではない。」(SW, IV, 287.)

## シェリング『世界年代』における時間哲学

解するが故に、時間なしに存在を考えていると〔言える〕。この構造そのものは確かに時間から解放されており、この構造はあらゆる時間のない永遠性である。時間は、シェリング自身に至るまでの古典の西洋形而上学においてなんら時間的なものでなく、空間のように時間的なものを含むある永遠の構造である。時間は伝統的に期間〔Zeitraum〕、すなわち tx-ty の空間であり、この空間のうちへ入り込むあらゆるもの、つまりあらゆる存在者を存在者として規定する普遍的秩序原理が存在することによって束ねられている。

ハイデガーがシェリングのうちに存在神学〔Ontotheologie〕との最初の根本的決裂を見たとき、彼は確かに優れて正しかった<sup>14</sup>。「存在神学」のもとではその際、存在と第一に現実的なものとの同一視、あらゆる生成を組織化するがそれ自体は生成から引き離されている原因との同一視が理解されうる。シェリングはその思想を放棄するのだが、そのことをシェリングは、「神の現存在〔Dasein〕は、いわば生成されたものとして把握されるべきだ」<sup>15</sup>とわれわれに要求することによって、神学の言葉を借りて定式化する。「神」は安定した偉大なものとして存在に組み込まれるのではなく、むしろそれ自体は神でも何か別の存在者でもない或るものから姿を現すプロセスとして描かれる。始原に先立つ始原は、それが文字通り自分自身に基づいてのみ理解されうることによって、根本的な始原である。このことが意味するのは、どんな後続の特性の継承やこれに合わせて適切に分節されたどんな構造も、「諸事物の現在の状態の完全な系譜学なしでは絶対に」<sup>16</sup>把握されえないということである。

「諸事物の現在の状態」という表現、つまり現在は、およそシェリングの時間やわれわれの時間を指すのではなく、構造化され理解可能な宇宙一般の状態にかかわる。伝統的におよそ無限の因果関係の連鎖として理解される物理学上の全期間〔Zeitraum〕 tx-ty は、シェリングにとって「現在」であり、彼はこれを今まで考えられたことのない過去や未来から区別する。事物の現在の状態はまさに、ほかならぬこの状態が偶然であるとの意識を持たずに、古代の形而上学が記述しようとしたものである。このような意識の唯一の痕跡をシェリングは彼の生涯で古代哲学のプラトンに見たのであり、とりわけテイマイオスとピレボスにおいて見たのである。それらの著作で、プラトンは一方で永遠の存在者 (τὸ ὄν ἀεί) と永遠の生成者 (τὸ γιγνώμενον μὲν ἀεί, ὄν δὲ οὐδέποτε) との二元論を導入し、しかしまた他方で存在のうちへの生成

---

<sup>14</sup> これに関しては次を参照せよ:Hühn, L./Jantzen, J. (Hrsg.): *Heideggers Schelling-Seminar (1927/28)*. Schellingiana Bd. 22, Stuttgart-Bad Cannstatt 2010.

<sup>15</sup> *Weltalter-Fragmente*, S. 213.

<sup>16</sup> *Ebd.*, S. 169.

## 第1部【講演】と【発表】

(γένεσις εἰς οὐσίαν) についても語った<sup>17</sup>。それに反して、在る〔存在 Sein〕と成る〔生成 Werden〕とがそこでお互に向かい合わせに見出される構造は、シェリングからすると、プラトンによって力動的に把握されてはいない。このことは、もちろん既に自由論の前段階に見ることもできるが、シェリングの「世界年代」哲学による革新である。

あらゆる生成を超えて受け継がれ保たれる、すべてを包括する安定的な根本構造を想定する古代の形而上学の配置を「存在の論理的意味」と名づけよう。すなわちそれは、時制的に変化させられることができず、例えば、馬は動物であるといった判断において繫辞〈コブラ〉で表現される存在の意味が存するという想定である<sup>18</sup>。馬が動物であるということは、2たす2が今日4なのではなく永遠にいつでも4であるのと同じように、まさか馬が今のところ動物であるということの意味するのではなく、馬が本質的に動物であることを意味する。

シェリングはいまや、存在の論理的意味と人間的行為が持つ構造の的外れな見解との結びつきを診断する。それによりシェリングは、ようやくハイデガー以降に再び現代哲学にたいして重要な役割を演じる指標的な思想を述べる。なぜならシェリングは、存在の論理的意味の想定が、行為は計画の実現、あるいはわれわれが行為目標について行う表象だという想定に依存することを認識しているからである。

「すすんですべてのものを、また最深のものを表象のうちへ解消したいと望む人間は十二分に存在する。しかし表象ではなく願望が先立つのである。意欲〔Wollen〕は第一のもの、いまやそれゆえ無条件的であり最高の自由において再び盲目的、必然的で、運命的なものとして現象する第一のものである。」<sup>19</sup>

シェリングはここでとりわけフィヒテ、そのうえラインホルトやカントを、すなわちシェリングと同時代のすべての哲学者を批判する。彼らはわれわれがあらゆる行為の現実性を表象の実現というモデルにしたがって理解すべきであるということから出発する。換言すれば、シェリングはここで、観念論的な根本理念に攻撃を行う。この理念によれば、われわれは、主体がそのなかで自らを客体に関係させる安定した諸表象を考慮することができるのである。ある行為は、安定した行為主体および安定した行為空間（世界）が要請されているとしても、一般に行

<sup>17</sup> 次を参照せよ:Platon: *Timaios* 27d6f. および *Philebos* 26d8.

<sup>18</sup> これに関しては次を参照せよ:Gabriel, M.: „Unvordenkliches Sein und Ereignis – Der Seinsbegriff beim späten Schelling und beim späten Heidegger“, in: Hühn/Jantzen, a.a.O., S. 81-112.

<sup>19</sup> *Weltalter-Fragmente*, S. 182f.

## シェリング『世界年代』における時間哲学

為目標の表象の実現化として理解されうる。ただし本来的な問いは、どのようにしてこの座標に至ったのかである。というのも、われわれはいかなる場合も、既にいつも行為主体が存在していたということを出発点にできないからである。それで問いの内容はこうである。いかなる条件のもとでもそもそも行為主体が成立するのか？またこの問いに対する返答は、その主体が主体自身の表象に基づいて実現されるということを前提にできない。というのも、このような表象は主観とともに初めて成立するとされるからである。

人間の行為現実性の自己記述から開始して、シェリングは、われわれが何かを求めたり望んだりするまさにその故にわれわれは自由である（またそれによってわれわれは行為しうるのであって単に生じるだけではない）という結論に至る。われわれの理論的および実践的な志向性の構造は、願望、憧憬および意欲によってまとめられているのであって、それはわれわれが行為目標についてなす具体的な表象によってではない。われわれが実践的には行為目標について、理論的にはわれわれの周囲世界についてなす概念上明確で構造化された表象は、せいぜい現在の状態記述であって、しかしシェリングも書いているように、決してその系譜学を跡づけることはできない。

われわれがそこに自身が存在すると考える構造は、或るものが現在のものとして現象するための条件が存在しているのだから、あらゆる現在において必然的なものとして記述される。まさしくそれに対して、シェリングは自らの時間哲学によって、表象世界の外見上安定した構造が、「過去」としてシェリングが記述する過程のひとつの結果だと反論する。シェリングはその際に、既に利用できた、万人から承認された見通しのよい根本真理、例えばわれわれが心的主体として、純粋な物理法則にしたがって記述されうる外的世界を目指すという真理のモデルからは、縁を切る。

「しかし共通の悟性〔常識〕が世界の根底にある過去の深みを予感しないから、そのため共通の悟性〔常識〕は現在の状態とその状況を永続的で無条件的な状態や状況と見なし、現在の状態から取り出したものを、意識の事実、あるいは人間の共通な悟性〔常識〕という言葉の名の下で、永遠の普遍妥当な真理だと詐称する。そして始原（原理）がどこかに現れるとしても、やはり共通の悟性〔常識〕がただ現在だけから引きだした意見によってこの始原に反論するのである。」<sup>20</sup>

---

<sup>20</sup> Ebd., S. 170.



## 第1部【講演】と【発表】

こうした文脈において、シェリングは「時間に関するカント主義」<sup>21</sup>の革命的に新しい考察を提案する。カント主義は「われわれの表象の単なる形式」<sup>22</sup>として時間を説明したのだと。もっとも、シェリングにとって、時間のこの考え方は、時間の典型的な間違った着想の記述ではあっても、なんら時間についての適切な記述ではない。この考え方はシェリングによれば、内部に自身固有の時間を持つ様々な事物を、實際上われわれの表象方法に起因する統一的基準へとわれわれがもたらすことによって生じる。自体的に「いかなる事物も[……]外的時間を持たず、すべての事物はまさに内的で固有の、事物に生得的で内属する時間」<sup>23</sup>を持つ。時間自体は、すなわち表象された時間ではなく、すべての存在者〔alles Seiende〕を包括するひとつの継承法則が存在することによって等質的なのではない。むしろどんな存在者も、存在者の始まりから終わりまでの展開が、ただ過程がまさしくこのような存在者を個体化する場合にのみ過程として認識可能であるが故に、存在者に固有の時間を持つのである。換言すれば、時間がもし普遍的に等質的な媒体〔Medium〕であるとすれば、どうして或る存在者が、それが時間のうちにあることによってなおも個体化されていることができるのだろうか？たとえわれわれがある存在者、例えばわれらの地球について、その存在が時間のうちで  $ta-tz$  にわたって広がっているとしようとしても、まさしくその期間〔Zeitraum〕を超えて広がる存在者は存在しうる。その場合に時間はもはやただ付随的な個体化要因でしかありえないのだ。このことはしかし、いずれにしても実存的時間とは相いれない。というのも、われわれは自身の誕生から死ぬまでわれわれ自身の命を、われわれを根本的に個体化するわれわれの固有な時間という光のうちに見るからである。われわれの人生時間はいかなる普遍的媒体でもない。そこから、シェリングは、普遍的時間媒体という理念が、誤った方向へ導かれた単一化であり、仮象像の産出であると推論する。ある入れ物への時間の単一化は、ある入れ物への空間の単一化と似て、抽象化の経過に負っている。シェリングはそのことを次の少し長めの文章のうちで明らかにしている。

「事物が時間のうちで生じるのではなく、それぞれの事物のうちで時間が新たに直接的に永遠性から生じるのである。そしてあらゆる事物について等しくあらゆる事物が時間の始原においてあるとすることができないとしても、やはり時間の始原がそれぞれの事物のうちにあり、しかもそれぞれの事物のうちに等しく永遠の始原がある。なぜなら、それによ

<sup>21</sup> SW, IV, 290.

<sup>22</sup> Ebd.

<sup>23</sup> Ebd. 事物の固有の時間という考え方が等質的で単線的な物理学的運動時間のアリストテレスによる基礎づけよりも歴史上根源的だということをミヒャエル・トイニッセンは浮き彫りにした。次を参照せよ: Theunissen, M.: *Pindar. Menschenlos und Wende der Zeit*. München 2000.

## シェリング『世界年代』における時間哲学

って世界が生じるのと同じ切断によってそれぞれの個別者が生じるから、したがって同じく初めに時間の固有の中心点を持って〔それぞれの個別者が〕生じるからである。その個別者の時間はそれぞれの瞬間においてその時間全体であり、時間にしたがって生成しながらもしかし個別者は時間のうちで生成しない。まさに個別者の外部に同じく自分自身のうちに時間を持つ別の存在者〔Wesen〕が存在していることによるのみ、一つの存在者の時間と他の存在者の時間の比較が可能になる。これによって初めて、すなわちさまざまな時間の比較と測定によって抽象的時間というあの仮象像が生じる。この抽象的時間についておそらく次のように言われることができる。〔すなわち〕この時間はわれわれの表象作用の単なる一つの方法であり、ただ必然的で生得的な方法ではなく、偶然的で習得された方法にすぎないと〔言われることができる〕。そしてこの仮象像に対して、さらに、以前から時間の実在性に対して挙げられていたすべての反論が向かうのである。」<sup>24</sup>

時間はシェリングにとって個体化の根本形式であるが、このことは行為理論による単純な考察に基づいても説明されうる。行為に関する最も単純な目的論的見解は、その行為を、前もって表象された目標の実現として理解する。こうしたモデルにおいてさえ、時制性が考慮されなければならない。時制性は行為計画を過去へ、行為を現在へと移し入れるのである。この箇所で、シェリングは、彼が中心的なものを見なす未来が見落とされてしまうと異論を唱える。われわれは一つの事例を取り上げよう。例えば、私は夕食のため仲間と落ち合うことを予定する。これは私の行為計画である。いまや私は、同僚との夕食をその概要を予想しながら思い描き、様々な役者に、私の生のなかつまり私の固有の時間におけるひとつの役割を割り当てるようにして行為目標を想像する。もっとも、確かに夕食は催されるが、しかしまったく予想とは異なる会話が進行し、そもそも予想外の事態が生じることになる。夕食が終わってからようやく、この夕食がどんな意味を持ったのか、回顧的に事後的に評価することができる。このことが今度はわれわれの動機状況に再び光を投げかける。われわれの行為計画は、あらかじめ十分に安定せずに毎回その行為計画を実現する力動的過程において破綻するのではなく、われわれが考慮に入れる要因が変化するので、われわれの行為計画は絶え間なくその実行の働きの中で変化する。レストランや地下鉄移動そして同僚たちといった固有の時間を持つ事物は互いに出会い、レストランへ行くという行為の時間や有意味さは、ただ過程のうちのみ生じる。行為にとって本質的なのは、行為の成果が予見される必要がなく、行為は確かに未来へと到達するが、

---

<sup>24</sup> SW, IV, 290f.

## 第1部【講演】と【発表】

しかしその未来は行為の意図が持つ意味を変えることができるということである。

別の箇所では、私はこのことを精神分析学に依拠して「事後的必然性」と呼んだが、これは想起時間の時制性に対応するものである<sup>25</sup>。生起〔Ereignis〕は、完結して初めて行為空間のうちに意味を獲得する。われわれの意志が現象となって現れ、過ぎ去った〔過去のな〕生起と体験との意味がわれわれの人格性〔Persönlichkeit〕の変化によってずれるとき初めて、われわれはわれわれが誰であり何を望むかを知る。われわれが過去の意味を創り上げることによって、過去を現在的に変化させることは、本質的にわれわれの過去に属する。絶え間なく生じる想起の働きは、われわれが過去の意味を変化させることにその本質がある。この転移や変換から独立し自体的に無意味に流れ出る等質的時間という理念は、行為を理解することにとってせいぜい副次的役割を演じるにすぎない。

シェリングは時間を一般にこの行為モデルにしたがって理解する。これに対応してシェリングは抽象的であらゆる事物に共通する物理的時間という想定を、誤った方向に導かれた自己記述であると解釈する。等質的時間の理念はそれゆえ、特定の実存的投企〔Entwurf〕や、われわれ自身の見解に対応する。このような理念にとって、およそ客観的なよりどころはまったく存在せず、この理念は時間についてのある見解に基づいている。シェリングは時間がわれわれの表象との結合のうちにあるというこの異端的意味においてカントと意見が一致するが、しかしすでに、匿名的表象主体の概念を伴い現れるわれわれ自身の単一化には反論している。表象主体は単に他の存在者のうちの存在者であり、シェリングはもはや表象主体を時間哲学的に中心へ置くようななんらのきっかけも見えていない。

「たいていの人、かの最高の自由を決して感じなかったが故に、彼らにとって存在者あるいは主体であることは最高のものに思える。それゆえ彼らは問う。いったいなにが存在を越えて考えられうるのか？そして自らこう返答する。無〔Nichts〕、あるいは無に似たようなものである。」<sup>26</sup>

ゼミナールでは私は、この思想の述定理論的基礎づけ〔die prädikationstheoretische Begründung〕についてより詳細に言及しよう。シェリングが遂行する時間概念における転換

---

<sup>25</sup> 次を参照せよ:Gabriel, M./Zizek, S.: *Mythology, Madness, and Laughter: Subjectivity in German Idealism*. New York/London 2009.ならびに:Gabriel, M.: *Transcendental Ontology: Essays in German Idealism*. New York/London 2011.

<sup>26</sup> SW, IV, 226.

のより良い理解のためには、次の論述で十分である。すなわち、或る存在者は、なにか或るもの、しかじかのもの〔So-und-So〕である或るものである。存在者はしかじかのもの、この-その-あのしかじかのもの〔der-die-das-So-und-So〕であると判断されることによって、常に真なる記述によって個体化されうる。ペーターは画家である、東京は首都である、日本は長い文化歴史を持つ国である、数字の4は3と5の間の自然数である等々。判断は決してふたつの論理的な固有名詞としては成立しない、すなわち或るものを何らかの仕方ですべて記述することなしに名付ける二つの定立からは成立しない（あるいはアリストテレス的に言えばこうなる。実体は決して何ものについても言明されない）。このことはフレーゲが彼の教えることの多い矛盾のない同一性判断についての分析によって最初に発見したのではなく、そのことはとりわけ既にシェリングにおいて、重要な役割を演じている。このことを私はゼミナールで詳細に論じたいと思う。ここでは論証のアプローチのみで十分である。われわれは次の命題を取り上げよう。

(1) アーノルド・シュワルツェネッガーはニューヨークのヘラクレスである。

この命題において「アーノルド・シュワルツェネッガー」は論理的固有名詞としての役割を果たしており（このことを私は後に別様に表現するが、しかしここではそうした単純化された論述で十分である）、他方で、それは映画の中であれこれと行った人物を示しているのだから、「ニューヨークのヘラクレス」はひとつの記述である。誰か他の人、たとえばシルヴェスター・スタローンがニューヨークのヘラクレスでもありえただろうが、しかし他の誰もアーノルド・シュワルツェネッガーではありえないだろう。或る存在者、例えばアーノルド・シュワルツェネッガーは、特定の記述が偶然的な仕方ですべて当てはまる或るものである。今や過去は、まだいかなる真なる記述も当てはまらない論理的固有名詞の定立である。シェリングが同義語として言うと思われる現在、存在あるいは世界は、特性を持つ存在者の真なる状態記述であり、他方で未来が偶然性の定立、つまり特性を変え、記述に対する論理的固有名詞の定立を主張することの可能性でもある。この意味で自由は過去におけるのと同様に、また未来においても、存在者に当てはまる有限に多くの記述の自由としてある。

表象主体であることは、いまやわれわれ各人に当てはまる、有限に多くの記述の中のひとつの記述であるにすぎない。したがって、そこにわれわれの自由は、「永遠の自由」<sup>27</sup>という意味で、基礎づけられていることができない。この「永遠の自由」は、意識するしないにかかわら

---

<sup>27</sup> SW, IV, 226.

## 第1部【講演】と【発表】

ず、われわれが記述を真なるものにすることによって、われわれがどんな状態記述も超出するという点にある。表象主体によってそのつど単一化される世界はそれゆえ選択肢がないのも、あるいは必然的なでもなく、その世界はただシェリングが探求する時間の一つの次元、すなわち現在にすぎないのである。

このことは現象学的に主張しうる。どんな瞬間にも、特性を持つ事物からなる周囲世界が私の前に現れている。私はその際に、あたかも諸事物が完全に記述されうるかのように、この周囲世界の統一を思い描く。もし私がこのときに事物を個体化しているすべてのものを知っているのだとしたら、すなわち、もし私があらゆる真なる記述を知っているのだとしたら、固有名詞は記述のうちへと解消されるはずだ。しかし事物は、誤って等質だと考えられた時間の切れ目  $t_1$  において考慮されない過去や未来を持つ。ある期間〔Zeitraum〕 $tx-ty$  にわたって存在している特性を持つ諸事物として事物を単一化するために、われわれは因果性概念のように追加の概念を導入する。シェリングの要点はいまや、われわれが、自身の四次元的な記述の歴史を持つ事物を考慮する場合には、その事物の過去を理解することができず、また未来は常に偶然性に縛られたままであるという理由から未来をも理解することができない、ということにある。アーノルド・シュワルツェネッガーは存在しないこともありえただろうが、彼はしかし一度存在はしたのだから、単一的時間つまり現在において、彼のあらゆる特性は必然的に彼に帰属する。アーノルド・シュワルツェネッガーに当てはまる真なる状態記述の単一化にのみ目が向けられると、彼の実存の偶然性を見落としてしまう。しかしその点にシェリングは、時間と様相の連関の間違った把握から生じる本来の誤謬を見ている。

最後に私はさらに二つの異論を検討しよう。

1. シェリングの方法に対する「自由論」以来よく知られた非難は、その方法があまりに擬人法的〔anthropomorphistisch〕だ、というものである。「世界年代」のよく知られた版の冒頭で、シェリングはこの方法を支持している：「というのも、われわれがあらゆるものをより人間的に取り上げれば取り上げるほど、ますますわれわれは、現実的歴史へと近づくことを期待できる」<sup>28</sup>。シェリングは、人間存在の条件から存在の存在論的条件へと推論するという実存主義的〔existentialistisch〕間違いを犯していないのだろうか？シェリングは、われわれの体験的あるいは実存的時間がある中に客観的に埋め込まれているような等質的物理的時間が決して存在しないことをいったいどこから知っているのだろうか？

こうした非難に対するシェリングの弁明は、私の考えでは次のように再構成されうる。われ

---

<sup>28</sup> SW, IV, 222.

## シェリング『世界年代』における時間哲学

われが三つの時間の次元を、実存的にのみ適切に記述されうる時間性の三つの生粋の脱自〔Ekstase〕として想定する時にのみ、いくつかの存在者は理解されうるとするならば、そのことは存在概念と時間概念へと光を投げかける。時間はその時もはやただ物理学的にだけ理解されうるものではない。狭い意味での物理学的時間は、せいぜいもう一つの局所的な現象である。

これは、ヴォルフラム・ホーグレーベが「弱い人間学的原理〔schwaches anthropisches Prinzip〕」<sup>29</sup>として示した、シェリングの普遍的な論証図式である。人間や人間の自己記述に当てはまるすべてのものは、局所的に全体に当てはまる。というのも、確かに全体は、われわれが局所的に存在することと両立しなければならないからである。さもなければわれわれは存在しないであろう。したがって、カントが構想したような、表象主体の等質的リズム化という時間構想から、その構想が本質的に不完全であるということが帰結する。この意味でシェリングはカントを、ただ局所的にのみ妥当する時間哲学を時間一般へと転用したとして非難する。

2. 二つ目の異論は一つ目の異論と密接に関係している。その異論は、十分に単一化された等質的時間が、つまり時間測定というわれわれの日常実践に当てはまるものが存在しなければならないというものである。この異論に対し、シェリングはもちろん弁明しうる。というのも、計測された時間は、共時的な切れ目や瞬間の取り上げ〔Momentaufnahme〕を許すことで、不連続な諸期間の内へと時間を分けるからである。極端な場合、全物理学的時間を  $t_0$ - $t_n$  の期間として理解することができるし、たとえば極大〔四次元〕時空間の概念、つまりその下で途方も無く巨大な事物、宇宙を表象することのできる「〔四次元〕時空間全体を定義することができる。宇宙は依然として、その実存が偶然的であるとされる場合にも、われわれがその過去と未来を考えることができなければならない、確かに現在でもこのことは誰も疑わない。ビッグバンの特異性はいずれにせよどんな従来の理解に倣っても必然的だと見なされえないし、〔四次元〕時空間の客観的性質にしたがって、〔四次元〕時空間の新しい特異性への収縮における時間の終わりについても有意義に語るすることができるだろう。私はこのことに決着をつけずにおく。弁明の要点は、何ものも偶然には存在しえず、それ自身の四次元的歴史と同一でもないという、普遍的存在論的テーゼにある。四次元的対象としての私について真に証言されうるすべてのものと私が同一である場合、私は本質的に私の真なる記述のすべてであるのだから、私の実存は偶然ではありえない。私がまさにここの行を書くことは、私が私の四次元的歴史と同一である場合、偶然な仕方では私について真であるのではない。もし私の四次元的実存の全体像の内では何らかの真なる状態記述が取り替えられるならば、私は別の事物や別の人格であるだろう

---

<sup>29</sup> 指標となる独創的な論文は次を参照せよ: Hogrebe, W.: *Prädikation und Genesis. Metaphysik als Fundamentalheuristik im Ausgang von Schellings »Die Weltalter«*. Frankfurt/Main 1989.

## 第1部【講演】と【発表】

う。

彼の根本的に改訂的〔revisionär〕な時間哲学のためのシェリングの議論は、それ相応に何もかも自由の問題を中心としている。シェリングをそうさせるのは、いかにしてわれわれが、存在するもしないも自由な或るものに、すなわち偶然的な仕方では存在する或るものに関係する論理的固有名詞を用いることができるのかという問いである。この点で「存在〔das Sein〕」はすべての真なる状態記述の総体性に対する名称、すなわち事実の全体性の意味での世界に対する名称なのだから、シェリングは自由を存在論的に基礎づけるために、第一に存在を遡及し過去へと、そして第二に存在を超え出て未来へと向かう。「私たち各人は、あらゆる必然性がただ存在から来るのだということを感じる；また一度たりとも存在しているなどと考えられ得ないものだけが、自然を超えた、いやそのうえ神をも超えた自由のうちに生きている」<sup>30</sup>。

最後に私は、さらに次のことだけを指摘したい。それは、いまや諸事物が自身の固有の時間に基づくことで根本的に独立化されたものとして現象しうることによって、シェリングは彼の時間哲学によって現在の断片化が脅威となるのを見ていたということである。それゆえシェリングは彼の晩年の哲学において、それでもなお彼の時間哲学を単一化し唯一絶対の時間について語るということを総じて認めるような未来を構想した。こうした単一化に対して既に「世界年代」で見られる名称は、「精神それ自体あるいは絶対的精神」<sup>31</sup>である。今のところ私は、シェリングが最後に取り組むこうした単一化が、やはりカール・ヤスパースがそう呼んだような、実存思想からのグノーシス主義への逆行ではないのかどうか、すなわち、内在的に必然的でありわれわれがその偶然的な実存を考えることのできない、すべてを包括する全体という理念のうちへの実存解明〔Existenzerhellung〕からの逆行ではないのかどうかを、未決定しておく<sup>32</sup>。

---

<sup>30</sup> SW, IV, 304.

<sup>31</sup> SW, IV, 279.

<sup>32</sup> 次を参照せよ：Jaspers, K.: *Schelling. Größe und Verhängnis*. München 1955. またこうした診断への批判について詳しくは次を参照：Gabriel, M.: *Der Mensch im Mythos. Untersuchungen über Ontotheologie, Anthropologie und Selbstbewußtseinsgeschichte in Schellings »Philosophie der Mythologie«*. New York/Berlin 2006.